

雜報

第二十五回卒業生人名

(○京都△九州□東北)

第一部甲類 英語法律科 政治科 經濟科

商業課 五十三名

福永 護 古庄 逸夫 熊谷 榮次
 ○中西 寅雄 河野 國廣 平島 俊郎
 ○小島 義方 ○吉田 肇 後藤 龍一郎
 ○右田 德 野中 魁一 ○佐藤 武夫
 宗 唯 見 野中 幸榮 小林 延七
 中村 金藏 內山田 次郎 關岡 巖
 能勢 政世 松村 道祥 久保 晋
 中島 辰三 山下 好幸 服部 勝威
 小林 重威 池田 榮三 高山 孝忠
 井上 正之 寺山 繁三 駕海 隆
 ○丸山 敬三郎 仁保 俊雄 森田 林
 神方 支介 林 穆 ○糸永 小一郎

第一部乙類 英語文科 二十四名

○野上 信幸 ○羽田 武内 大城 朝申
 松原 暢 古賀 保暉 山田 城之
 板井 實 宇佐美 喬爾 田崎 示
 ○坂本 隆二 松永 要 藤井 房雄
 ○松田 光 勝部 辰雄 藤村 正美
 栗屋 靜 吉岡 嘉雄
 山本 正巳 柳田 加藤次 栗本 正信
 中津海 知方 前田 一 ○宮本 清
 ○佐藤 均 ○白石 要 ○田中 瑞穗
 ○中牟田 長次郎 ○天野 俊助 津留 熊雄
 東法 湯淺 庄太郎 ○鹽路 清太郎 東法 松永 義治
 東法 武藤 義就 古庄 國雄 ○藤松 次六
 ○西川 峻 ○大塚 捷平 小倉 正
 長岡 丁英 ○山本 貫一 ○山本 公三
 第一部丙類 獨語法律科 政治科 三十二名
 佐藤 格 飯塚 渡清男 御厨 信市
 里嘉 榮則 山崎 巖 松崎 陽一
 階川 良一 高岡 寧 古川 倫
 小野 哲一 森田 常胤 吉村 德藏

内藤 石坂 繁 大谷 義英
△佐々木 政吉 石田 壽 大和 晴彦
△元森 信夫 楊田 修生 並木 重義

林 藤 香 森島 芳男 矢頭 喜一
△西川 延喜 東清水 俊雄 〇筒井 久次郎

上田 吉郎 曾布川 征夫 〇野田 海造
△白石 鐵藏 今村 洋吉 △陶山 勇

原田 士驥雄 大塚 今比古 酒井 輝馬
〇丁 瑞霖 〇今村 四郎 △磯部 吉工門

小田垣 常夫 阿部 正次 打出 信行
猪熊 恒夫 理科 四名

〇野口 貞香 〇兼崎 理藏
第二部乙類 理科 四名

第二部甲類 工科 五十二名
〇小田 耕助 〇山田 巖 〇小西 常太郎

河崎 松之助 四杉 喬次郎 本木 修一郎
〇中村 貞輔 農科 二十一名

△早田 規矩一 尾山 輝雄 安元 銀三九
江本 昌男 永松 統治 伊藤 兆司

萱島 丈夫 小林 春光 △河野 正吉
吉川 不可止 立山 軍藏 金原 發

酒見 恒太郎 中野 薄 △田中 仙之助
西村 恒雄 中富 貞夫 永松 元一

有近 彌榮 △山下 善太郎 △貝志堅 實成
藤原 義文 〇醫中川 喜代治 小森谷 光三

△上田 卓爾 永井 英修 山崎 慎二
右賀 正巳 井水 正名 中川 喜代治

△花田 幸吉 △大木 義雄 △吉村 倫之助
有馬 桂 松林 繁樹 檜崎 敏夫

△篠崎 彦二 〇栗屋 照政 △森 謙二
田中 定夫 小賦 繁太郎 井浦 彌三

△吉田 等 宮崎 正人 △田坂 吉二郎
第二部乙類 醫科之內藥學科 二名

△堀 鶴雄 △綿貫 保一 △大脇 策市
田中 義雄 田中 義之

京田 崎 正浩 △服部 勘一 圖子 武八
第三部 醫科 三十二名

△木下 彌輔 〇吉峰 弘造 △竹 中 康

○久保 久雄 林 勝三 △山下 實

前川 正元 古川 達夫 △矢野 恭一

中島 茂規 吉村 克躬 △荒木 辰一

△岸本 英世 △江浦 重成 ○佐伯 勤

△城 通治 □大瀧 郁三郎 △廣橋 齊造

中尾 秀雄 △井上 秀夫 △副島 廉治

△松前 誠一 △白川 壽那夫 △吉住 好夫

朝倉 卓 古川 繁人 △飯村 實

△吉永 貫一 福田 玄昶 ○福原 浩

△楠本 二郎 □清水 茂 三澤 廣忠

□橋本 欽次 △森田 近

入 學 式

九月十二日濟美館にて舉げられたり。吉岡校長告辭を朗讀し然る後之を布衍して、智能を自發的活動により啓發すべきこと、自覺自修の主義を以て徳性を涵養すべきこと、衛生を重んじ體軀を鍊るべきこと等に就いて訓諭せらる。新入生の簡單なる答辭に次ぎて新舊生徒相互の挨拶あり。終つて全學年皆出席者の服裝、持物等選定の事あり。閉式は午前十時半

頃なりき。

本學年度特待生の氏名左の如

一、三、甲二池田 鹿一 一、三、丙 梯 武雄

二、三、甲一 瀬 亘 二、三、甲二 小 野 寛

二、三、甲二 西 原 潤 三、三 松 田 彰

一、二、甲一 伊藤 幹一 一、二、甲二 平 山 良吉

一、二、甲二 大江 昇 一、二、丙 林 繁三

三、二 楠 五郎雄

第廿六回紀念運動會記事

昨日の模様では少し心懸りになつて居た空が今朝は未練氣も無く晴れ渡つて、眼の極み青々しい透澄な秋空の下びに筋張り切つた金峰嵐が琳琅の音を傳へる。午前十時から紀念式が舉行せられる。門前と濟美館前の瀟洒な綠門を潜つて七十有余の來賓が陸續として式場に參集せられる。やがて開式、校長の式辭、職員總代江部教授の祝辭、來賓總代川口高工校長(本校第一回卒業生)及び稅務監督局長多胡敬三郎氏の祝賀演說、生徒總代空閑克己君の祝辭の後莊重な校歌の音律が場に溢れる。式後東大在學卒業生より

の書物歌（代讀者井田君）牛原清彦君作の銀歌

（代讀者佐々弘雄君）土肥俊彦君の漢詩が朗讀せら

れ。又柔剣道の仕合が催される。

午砲が鳴ると全時に運動會が開始せられる。緑紅白の大旗が吹き渡る金風に翻々と翻る。中でも文科の席二十枚の大旗が西南のコオナアに嚴然として居るのが著しく異彩を放つて居る、立派なスタンドも幾多設けられて應援の熱叫に地軸も搖がんばかりである。參觀者は十重二十重に場を取り巻いて遅くなつて來た爲見る事が出來ずに殘念相に歸つた人も随分澤山の様だつた。此日各種のレエスで勝利の榮冠に男兒の意氣を誇つた健兒諸君の名を左に列記する。

第一回二百ヤード

- 一、佐藤 二、渡邊 三、北川

第二回全

- 一、有田 二、山田 三、原田

第三回火事見舞

- 一、永井 二、上杉 三、稻石

第四回全

- 一、山本 二、黒瀨 三、小平

第五回尺取競走

第六回三人四脚

- 一、永井、森、岡本、二、吉岡、佐々木、岩武。

第七回サツクレエス

- 一、尾上 二、岡本 三、山田

第八回全

- 一、森部 二、黒木 三、岡部

第九回四百四十ヤード

- 一、井上 二、有田 三、齊藤

第十回全

- 一、森 二、高津 三、山田

第十一回運搬競走

- 一、三輪 二、宇都宮 三、上村

第十二回全

- 一、古城 二、橋村 三、中原

第十三回武裝競走

- 一、荒巻 二、菖蒲 三、岡本

第十四回戴靈スプーン

- 一、菖蒲 二、荒巻 三、永井

第十五回全

- 一、迫 二、小河 三、程野

第十六回腕力競争

- 一、中村 (二三等不明)

第十七回下駄競走

一、井手 二、瓦田
第十八回ビスケット

一、古城 二、原 三、高橋
第十九回全

一、有田 二、村上 三、迫

第二十回櫓廻シ

一、中村 二、福田 三、牛尾

第二十一回櫓廻シ

一、宇都宮 二、本多 三、上村

第二十二回障害物

一、井田 二、豊島 三、荒巻

第二十三回全

一、山田 二、菖蒲 三、宮崎 四、有田

第二十四回競握

一、蓮尾 二、川上 三、河崎

第二十五回全

一、古城 二、三輪 三、佐々木

第二十六回連續(二年)(一分廿六秒)

一部 崎田 笠 森

第二十七回全(二年)(一分廿六秒半)

一部 佐藤 山本 山田

第二十八回全(三年)(一分廿三秒)

一部 有田 井上 中原

第二十九回龍南會各部競走

一、柔道部 有田 井上 古城

二、演說部 吉岡 岡部 友杉

第三十回拜借競走

一、山崎 二、小倉 三、波多野 四、五、市丸

第三十一回小學校選手競走

一、(附屬)江藤 二、(廣旗)柴田 三、(中部)丸山

四、(飽田北部)中野 五、(熊本高等)畑中

第三十二回小使炊夫競走

一、緒方 二、福田 三、上村 四、平山 五、藤木

第三十三回各寮選手競走

一、第三寮 香原 宇井

第三十四回中等學校選手競走(一分廿八秒五)

一、(第二師範)島田 二、(熊本商業)野口 三、(工業)吉武

四、(第二師範)富田 五、(九州學院)大塚

第三十五回專門學校選手競走(二分十八秒)

一、(醫專)川島 二、(藥專)瀬川 三、(藥專)柴田

第三十六回八百八十ヤード(二分廿七秒)

一、橋口 二、森 三、津島

第三十七回各部選手競走(二分十九秒八)

選手 一部(綠) 黒田 新居 石田

二部(白) 濱本 齊藤 池田

三部(赤) 馬渡 齊藤 伊藤

真赤い落陽が斜めに武夫原を照らして健兒の白衣を黄色に染める頃先づ一部生は綠旗の波濤を搖がして武夫原に乗り込んで来る。先頭には胴の上に三人の應援幹部を乗せた大太鼓が悠容と山の如き姿を動かす。綠の波が右へ場を一週すると赤の波が左へ一週する優勝旗を返却した二部生が中央で應援歌を怒鳴ると綠の波は最一度場を右へ廻つて大々的に示威運動をする。怒號、狂喚、寔に悲壯である、凄愴である。五時卅分九名の選手はスタアトに集り審判長の注意を受けるとやがて銃聲一發、骸子は遂に投げられた。蒼然たる暮色は漸く武夫原に迫つて綠紅白の應援旗は巨濤の如く四週に奔蕩する。榮がある九つのユニホオムは黄昏を縫うて征矢の様に飛ぶ。一週目は白赤白々綠二週目は赤白白綠三週目は白綠白赤四週目綠白々。——高潮に達した泉の波は決河の勢で決勝點へ押し寄せる。ごよめく歡呼の響は實にや不退轉の管弦樂である。

一、(二部)黒田 二、(二部)齊藤 三、(二部)池田

未曾有の盛況を呈した運動會は遂に終りを告げる。やがて玲瓏たる月が立田山を離れて勝敗様々の夢を

抱擁せる武夫原に清光を流す。原頭では炎々たる篝火を圍んで未だ一部生が酣歌踏舞して居る。勝利の寵兒よ、榮光の健兒よ、いざいざ今宵一夜を狂踏せよや狂踏せよや。

附記、時間の都合上二三の競技は省略された。

クロワスカントリイレエス

十月十一日。今日も紺青の空が火の山裾の國の上に擴がる。浙瀝の金風に健兒の赤い血は脉々として身ぬちを廻る。一時半七十の白衣は武夫原を出發して西へ去る。競走道路には犇々と市民が押し寄せて此の壯快事を嘆美する。西へ去つた白衣の英姿はやがて市の中央を東へと飛び去る。紅潮を呈した顔、張り切れんとする筋肉、誠に力のフィルムである。色様々な關所通過證を肩から幾條もかけたユニホオム姿が武夫原南端の松林から現れたのは約一時間の後であつた。

一、一時三分卅八秒 馬渡君(三部)

二、一時三分四五秒 西原君(二部)

三、一時五分一二秒 香原君(二部)

四、一時六分四秒 齊藤君(三部)

五、一時七分一七秒

松尾君(一部)

六、堤君(一部)

七、橋口君(二部)

八、今村君(三部)

九、菖蒲君(二部)

十、石田君(一部)

十一、高津君(一部)

十二、三淵君(一部)

十三、矢野君(二部)

十四、藤本君(一部)

十五、宇井君(二部)

十六、田寺君(二部)

十七、菅野君(三部)

十八、岡部君(一部)

十九、上杉君(三部)

二十、木村君(一部)

二十一、高田君(一部)

二十二、垣田君(三部)

二十三、津島君(二部)

二十四、岡部君(三部)

二十五、三村君(一部)

二十六、川上君(二部)

二十七、福田君(一部)

二十八、三上君(三部)

二十九、攝津君(三部)

三十、辻野君(三部)

以上受賞者以下略

皇太子殿下御眞影奉戴式

十月廿七日午後二時武夫原に武裝集合の上、上熊本驛に奉迎し、御眞影に隨ひて歸校、濟美館に於て奉戴式を擧げたり。昨年此の日は兩陛下の御眞影を奉戴し、今年も亦此の日に日嗣の御子の御尊影を迎へ奉る。龍南の吉日なる哉。

立太子奉祝式及び奉祝提灯行列。

十一月三日午前九時卅分より濟美館に於て舉行、職員の御眞影拜賀、生徒の拜賀了りて「君が代」を合唱し、更に校長の發聲に和し、皇太子殿下の萬歳を三

唱して式を閉ぢたり。此の日こそは明治天皇の生れまし、日として、曾つては億兆の民草心を一にして祝ひ奉りし佳辰なりしを思へば追懷の糸綿々として盡きざると共に、又皇太子殿下の御行末如何ばかりか御光に溢れんと、心からなる御祝福を献げ奉る。

全夜午後六時より全校生徒九百各自日の丸提灯を掲げて奉祝提灯行列を舉行せり。蜿々たる紅龍は廣町通町鷹匠町を経て紀念碑に至り更に洗馬橋を渡り唐人町を過ぎ再び通町に入り草葉町縣廳前を過ぎ藤崎八幡社前の馬場に於て萬歳三唱の上解散せり。

山岳會會報

思へば二年前の事である。うら若い望に燃わつ、私は常春の國龍南の人と成つた。旬日ならずして龍南青春の發露を到る所に見出した。辯論に、思想、文藝に青春の躍動を見出した。斯くして私の心は躍つた。されど、日頃憧憬し熱望せし山岳部は那邊にも其の存在を示して呉れなかつた。當時の失望、果して如何なであつたらう。

龍南の天地にも最早や蕭々たる風が吹き荒ぶに至つ

た。心竊に私は幾多の先輩を恨んだ。彼等の中果して一の山岳愛好者がゐなかつたのであらうか。否、否、多くの愛好者が居つたに相違あるまい。唯だ一人の建設者がゐなかつたのであらう。かくて唯だ一人淋しき思ひに掻き暮れて幾度か阿蘇に温泉に杖を曳いたのであつた。漂浪の旅を決して無意味のものではない。山道を辿る一旅人の心にも自ら慕はしい情緒はある、然し高峻なる山岳は決して單獨の登山を許さない。團体的登山旅行、そこには漂浪の旅と異なる一種の懐かしい情調がある。共同的愉快味がある。かゝる理由に依つて山岳部(會)の存在は決して無意義なものではないと、心竊に思つた居た。

思へば丁度昨年(一九二四年)の十二月一日、友の京都遠征を送ると云つて親しい友が相依つてさゝやかなる一夜の宴を張つた。話題は移り移つて山岳論に及んだ。甲論乙駁氣焔萬丈の有様であつた。井田哲君の山岳論は私の宿論と全然符節を合するものであつた。

私は非常に喜んだ。そして相俱に山岳部(會)建設を誓ふに至つた。或時は他校(各高等學校)に書翰を遣つて山岳部の組織を訪ねた。西川先生を訪問して其

の後援を請うた事もあつた。かくして幾月は経過した。機は遂に熟して大正五年五月一日次の規約を作るに至つた。

五高山岳會規約

- 一、本會ハ五高山岳會ト名ク
 - 一、本會ノ目的ハ實質剛健ノ氣象ト一致協力ノ精神トヲ涵養シ自然ニ對スル高尚ナル趣味ヲ養フニアリ
 - 一、本會ハ隨時旅行登山ヲ試ミ時々講演會ヲ開ク(殊ニ夏期ナ利用シテ大旅行ヲ企ツ)
 - 一、本會ハ五高職員生徒ノ有志者ヲ以テ組織ス
 - 一、本會ハ會長一名幹事一名委員若干名ヲ置ク
 - 一、委員ノ任期ハ一ケ年トス
 - 一、本會會員ハ年金三十錢ヲ納ムルモノトス
(但シ旅行ニ要スル費用ハ其ノ都度コレヲ徵集ス)
- そして直ちに學校の許可を得た。悲壯なる檄文は貼られた。其の結果か實に九十六名の多數會員を得るに至つた。
- 五月十四日發會式を兼ねて入牙ヶ岳(限府北三里約三千五百尺)に第一回登山旅行を試みた。小松、西川、小島の諸先生を筆頭に總勢十五名デリ／＼と照りつける太陽を物ともせず山道を辿つたのである。

あの突兀と聳ゆる八牙の峯。急勾配を辿り行く十五名の姿は雄々しくも又勇ましかつた。左に鞍を前に金峯二ノ岳三ノ岳の勇姿を眺めて我等は發會式を舉げたのであつた。茲に、眞實の意味に於て五高山岳會は成り立つた。

役員も定つた。かくて會の基礎も確實に成つた。

長い暑中休暇も濟んで若かゝと血に漲つた人々が龍南に立て籠る頃と成つた。三百の健兒を迎へた龍南は一段と新なる活氣を呈した。我等も亦二十余名の健兒を迎へた。秋は活氣の時季である。登山のシーズンである。私等の活躍すべき時である。

青く澄み渡つた大空にくつきりと聳ねたつ山々を仰いで我々の心は齊しく躍らざるを得ない。我等は此の季をして意義あらしむべく

九月二十三兩日 阿蘇登山(同行者三十一人)

十一月十二日 鞍ヶ岳登山(全 五人)

十一月二十六日 金峰山河内廻り(全十一人)

の三回、登山旅行を試みて幾分なりとも溢れ来る山岳趣味を充たしたのである。山岳跋涉の精神的に肉体的に有効なのは敢て茲に贅言する迄もない。我會

は今后増々努力して其の証左を顯著ならしめたい、願くは龍南の諸兄來つて我會に投せられよ。自然の卿等を俟つや切にして且つ久しである(久忍男記)

發火演習行

例年四日を費して大々的に舉行せられた發火演習が一泊の豫定を以て而も縣下で行はれる事となつた事が皆の興味を減殺せぬでもなかつたけれど一方には神秘な傳説に彩られた汀長い不知火の海や水清き球磨の流れが皆の感興を唆らずには居なかつた。

とに角十一月廿日の黎明の武夫原にはいくつかの提灯があちこちと忙しさうに動いて居た。そして朝日が威勢よく最初の光線を怪物のような煉瓦家に浴せかける頃は、二年、三年、合せて三百余名の健兒が体伍堂々煉瓦門の松の間から立田口道へ流れ出して居た。

上熊本驛から汽車に乗つて有佐驛で下車。南軍は少しくさきに出發、北軍もその後から廣い八代の原野を縫つて鏡町方面に進軍した。そしてこの日の戦闘

は島田、海士江附近で猛烈に開始された。

戦況。南軍は鏡八代舊街道を経て會地附近に到着して直ちに防禦陣地を占領した。そして右は井上から會地に渡つて第一線を布き豫備隊三個中隊（二個中隊は假設）を井上東端に置いて敵の新開方面から来るのを徐ろに射撃した。この時第六中隊を尖兵として新牟田を経て進軍した北軍は射撃有効距離に達するや徐ろに展開して射撃を初めた。そして數分の後南北兩軍は互に來るべき猛烈なる白兵戦を期待しつつ、猛烈に射撃を初め北軍の攻撃猛烈となり兩軍の間隔三百米突に達すると白兵戦はこゝに演出せられてこの日の壯觀は愈々クライマックスに達した。

演習後三百余の健兒は元氣旺盛、武夫原の敵を高誦して南日奈久さして坦々たる道を進んだ。そして美しい球磨の流れを渡りながら不知火海から吹いてくる氣持よい微風を浴びて新鮮な意氣を回復した。

夕刻日奈久に着いた。その夜は宿屋の二階にも街の隅々にも温泉の温かい湯氣の中にも強烈な蠻歌の旋

律が漲つた。

一夜が夢のように明けた。むさくるしい漁夫が舟をあやつつて沖に出て行くなつかしい景色も見ずに三百の健兒は八代方面に進軍すべく日奈久街道を北に向つた。そして今日の演習は平山附近で行はれた。

戦況。かくて戦は兩軍の斥候兵の衝突を以て始まつた。斥候の報知を以てよく敵狀を知り得た兩軍はその距離が近接すると銃聲は愈々烈しくなつてその距離が三百米突に達すると又白兵戦となつた。休戦のラッパがなつてから間もなく健兒は八代に向つて出發した。

前日から出して來た雜誌部の陣中時報は販途汽車中で手を眞黒にして欄筆の辭を刷つた。八代ザボンが車中到的所にその黄色の顔をさらして八代との別れを惜んでゐるように思はれた。（十二、一〇、盧彥生）

第三回懸賞文の成績と批評

少しは應募期限を延ばして見ても集つたのが又もや

僅か六篇とは惜けない。どういふ譯か究めたいものだ。さて例に依り六名の審査員のお方々から評點を貰つて其和を六除して得た結果はかうである。

差出順

總點 平均

(一) 花散る頃(小説)

三五〇 五八、三

(二) 市藏(小説)

三一〇 五一、七

(三) 休暇の夜話(小説)

三二八 五四、七

(四) 塔の聳ゆる國(感想)

三七六 六二、七

(五) 事物の根本關係を論じ

て象徵主義に及ぶ(論說) 四七〇

七八、三

(六) 死ぬまで(小説)

三四八 五八、〇

此中六十點以上のもの二篇と第四等の「死ぬまで」とは本誌に掲げてある。第三等の「花散る頃」は「小説中の白眉ではあれどいかにも學校の雜誌には」と云ふやうな物言ひが附いたので見合はすることにした批評は豫め願つては置いたが期待した以上に精細にして下さつたので之を題別にせずに芳名別にして感謝の意を表する(部長)

○長江教授の評

應募作が今回も驚く勿れ。たつた六篇。夫で居て懸

賞も凄しい。何時もながら小説が優勢だ。全體から言つて内容に於て嶄新など思へるのが乍遺憾一つも無い。齊しくあり觸れた思想の燒き直しか、模倣かさらすは繼ぎ合せだ。少し神妙に、少し熱心に文藝俱樂部なり中央公論なり新小説なりを繙讀せば、誰にまれ一寸小器用でさへ、有りや、這れ位の小品は物するに差して骨の折れ様道理は無い。六七句の休暇を我物としての此体裁は何としても物足らぬ。一番一新奇軸をその頼母敷い試みの、かいくれ見ねなかつたのは返す／＼情ない心地がする、前人未踏破の方面は最早皆無であらうか。饒使踏破されて居るにしても未だいやが上に踏み蹂^じまれ居らぬ領域が――換言せば、まだ――未知の新味の充分に宿つてをる未開懇地が小説の爲めも那邊にか存在してをらぬだらうか。形式平たく言へば書き振りは、さはいへ前々のに比較して、進境の見ねるのは嬉しい。

論文に於て割に佳く出來たと思うたのが、一つ有つた。養田氏の「事物の根本關係を論じて象徵主義に及ぶ」と銘打つて表はれたのが夫れだ。何人が見ても今回の少數應募文の中で比載的孰れが佳作なりや

との間に對し、此篇を推すに躊躇する人はあるまい。これを總論として、以下各評に移らう。(いろは)に記號を冠せしたのは讀者の便宜を計つた迄で、這裡に何等の差別の無いのを豫め斷つて置く。

(い)「事物の根本關係を論じて象徵主義に及ぶ」筆を苦惱の本源に起し、本体と現象との關係を論じ、寛克彦氏の事物相關論に渡り、一念三千、十玄緣起を説き、結論に移り、カアペンタアの象徵詩に筆を擱いて居る。隨分長篇だ。苦惱の本源は有史以來東西幾千萬の大小宗教家哲學者が齊しく腦漿を絞つて解決を試みた最も古い問題ではあるが、而かも依然として未解決なる、従つて或意味に於ける新しい問題である。簗田氏の此公案を看取せむとて。眞如と假相との關係より入り込まれたのは、好箇の道を探られたと言つて可からう。が而し恁邊の談論は佛者も言ひ、古來ありふれてゐるので吾人の片唾を呑んで渾身の注意を一點に集注する所以のものは外に在る即ち此重大問題を結局論者は什麼に解決し了さるかを聴きたいからである。所が論者は此解決其物に甚大な力を寄與さるゝ代に、解決の一資料たる可き

一念三千、十玄緣起なるの説明におよりに多く没頭された結果、吾人は論者に因り、今更に法華經か何らの講釋をくぐりと聞かざるゝ様な想ひがした。殊に一念三千論の如き象徵主義に論及さるべき道程の一宿場に過ぎざるに係はらず。さながら一念三千の解釋其物が問題の眼目、終局の目的なるかの如く、叮嚀親切に説明されたるは、本末輕重の別を忘れられたるに非ずやとの感ありてあたらし。殊に肝緊要の象徵主義を論せられ、此主義に、なぎを附けらるべき所に至りて、筆却て俄に省略されたるよりして枝葉の繁みに、幹の所在の怪しうなつた趣がある。小林一郎氏近著「信仰百話」なるものを公にせられたる中に、同じく一念三千の義理を詳細に闡明せられたる一則がある。さはれ這是或人の問が一念三千夫自身の詳解を要求せるの然らしむる所で、固より同日に論ず可きに非ずだ。一念三千論、十玄緣起說などは畢竟結論を明瞭ならしむる迄の材料に過ぎざるに、眞に少なからざる紙數を之に割き乍ら夫れも「象徵主義に及ぶ」か義理明白ならばまだしも案外結末の之に釣合はす勿々不充分裏に終を告げたるは當初の

道具建ての大業なる丈に一層龍頭蛇尾の感あるは残念といふの外なし。加旃發端に堂々掲げられたる苦腦の本源に對する明答解決は何處に行つたやら。余は吳々も、道中をすつと簡約凝縮せられ、末章に極大の力を振はれなかつたのを惜む者である。以上は想の上より忌憚なく所見を述べたのであるが、今一言、想を離れ、文章に就きて言はむに、氏の筆は一瀉千里縱橫無碍、意を達するに眞に何等の苦辛なき觀がある。さはれ氏は自己の筆に信賴する事、あまりに過度ならざるやを疑ふ。所々不充分にして文に時に放縱の跡はの見えるは夫れ之に基因するのであるまいか。天下の名文は内容と形体との完全なる調和に在て存す。さはれ確に未來の有人と信ずるから敢て苦言を呈した。

(ろ)「花散る頃」と題からして徹臭くおつに時代めいて響く麗子といふ妙齡の佳人——お定りの——を主人公とし之に五高二部生章雄といふのを配した。寧ろ陳腐なラブ・ストーリーだ。「振分髪」「陽春四月花開き鳥歌ふ」などより「軍人の未亡人其娘」、「天草の海水浴」「縁談、見合ひ」、章雄への心中立てか

らしてからが。新しい點は藥にする程も無い。其麗子なるものが末尾に至り章雄よりメスを借りAを臍指に書いたとある。三刀は必要だ。軍人の娘かは知らぬが随分豪勢だ。或る里の女の様だ。慥か並木五瓶の作五大力云々と題する作品中に小萬といふ女が指を切る所があるが明治大正には如何に考へて見ても有る間敷事と思ふ。Aを刻む所が灰穀娘なのは知らぬが『徹頭徹尾思ひ切つて御白粉臭ひ、なまめかしい作だ。俊子といふのが三回迄見ゆる始めは如何なる女性で、作に什麼なる干係を有してをるか、注意を緊張し其發展の跡をたどつたが、麗子の母でもなし、伯母らしくも無い。結局麗子と書く可きを俊子と書き附けたものとしか想へぬ。果して然らば念の入つた不注意だと斷じて置く。第壹章が六頁一杯から成つてをる。そして五高庭、圖書館、地質教室其物の光景堀緒先生の容子などが細叙されてをる。此一章定めし全篇に重大な關係があるのだらうとの豫期を以て讀みて行つた所、所詮章雄なるものが五高生である二部生であると言ふ事を吾人に紹介するに過ぎぬ。小説のシ、ユ、カ、ホ、を知らしむる丈

は何が爲に斯程迄の細筆を要するのや。象徴的のや
印象的に、迄簡約なれどは敢て強ひないが、あま
にあまりに作者は、已が日常目撃する所を描寫する
にのみ急にして作の本筋に對し加減する所なからざ
る可からざるを忘れたのは確に缺點だ副文章は本文
章の思想を補助するまでの役目なれ。くれぐれも環
境を匂はす迄に止めざりしは拙である。次に章雄が
朝下宿を出る時郵便屋から受取つた手紙を晝食後迄
悠々ポケット住居を命じたのは青春の章雄の行爲と
しては不自然としか見えず。よくも辛抱が出来た者
だ行文は手なれて居る様だ。大分此種の文學を翫味
されたものと思はれる。

は塔の聳ゆる國。字体を明瞭に認められたのは吾等
一同の多とする所だ。随分派手な文章だ。一頃流行
した民友社文体の淨化したものと評したら、中らず
と雖ども遠からずだと思ふ。さういや、想ひなしか、
何處かに基督敎的な香が漂うてをるやうだ。有體に
且つ大胆に余をして評隲する事を許されよ。余は此
一篇を讀了した揚句、果して何が論旨なのかと考一
考したが、茫漠として定かに何物をも捕捉する事が

出来なかつた。成程、その間、一句一段を隔離
室に入れて見ると、觀る目もあやに、燦たる光明を
放つ錦玉の文字もあるが、かばかり華美な文字を聯
らねながら、偕て想はと翻て調らるゝと、貧弱で第
一甲の思想より乙の思想への脈絡關係發展の迹がま
ことに怪しい。少々穿ち過ぎたかは知らぬが、此一
篇想に圓熟したものがあつて然る後、綴られたもの
で無くて、文字の爲に想が喚び出たされ、其結果自
然内容に空虚があり不完全が宿つたと言つた様な塩
梅だ。雜誌新聞などで此種文字を豫め拾ひ置き、折
角聚まつたのを、幾んど悉く綴り合はせたと言つた
様な嫌ひが無いでもない。其爲肝要な思想を明確に
徹底的に表現する方の注意が、餘程御留守になつた。

内容と形式とは互に調和す可きもので兩者の間に強
て輕重を附し難きものがあるが、されば思想の形に
役せらるゝに至りては本來沙汰の限りだと思ふ。重
箱ばかり馬鹿に綺麗な京都風も下さらぬ。あまりに
思ひ切つた無禮な言ひ振りではないか。
(に休暇の夜語 對話は総て熊本辯の様だ。作者が親
しき經驗の結晶らしい。一種の郷土文學だ夏の夕の

八時から十二時迄の間に、目に見耳に聞く事につれ
想ひ出と雜感とを書き流したものだ。觀念連合作用
の各種が此處に應用されてゐる。今一々此れは同作
用の何種に屬すると心理學者の御先觸れめいた解剖
は遠慮するが、蓋し此作品中取り出で、言ふ可き點
は思想の此作用に依り様々に夫れから夫れへと推移
する邊にあるだらう。がしかし推移が足らぬ。浪漫
底克が御好きな様だが、何だかつて燒刃めいて有難
くない。「卑肉」、「眠に入つて占つた」など妙な字を
當てた者だ。「私が忘れも能はぬ」と言つた句調も近
頃雜誌にちらほら見る様にもあるが、又行く行くは
當り前の様に成つて仕舞ふたらうとは想像もされる
が、強て新奇を衒ふ歐文崇拜家の氣ざな模倣だと思
ふ。

は「市藏」。市藏といふ村男が四年生の時意馬の狂ふ
まゝに筆記帳を盗んだが原因で、爾來正路を歩むで
をるに係はらず同級生からも世間からも常に疑ひの
眼を以て睨らまれた果、元來意志力の弱き男丈に自
暴自棄に陥り再び鶏を窃み一週間の拘留を喰らひ偕
て社會は已れより遙に大なる惡人を許しながら、我

小過に對し無慙冷酷なるを怨じ遂に村を出奔將來ど
うなるかを隠したノベレットだ。近者宗教家から
の口からも屢ば耳にするところ。種の新舊敢て深く
問ふを要せずだが、叙事も平凡だから、とり出でて
言ふ程にてもなからう。あまゝ種の新舊を摺く様だ
が、種は古くとも其扱ひ方さへ、前人以外に又以上
に出で、さへ居れば、無論何等差支へ無きは、必ず
しもレツシングを待たすとも判り切つた事だ。

（「死ぬる迄」）秀夫なるもの幼にして母を失ひ慈父
の許に養はる。小説は此父が病院にて死する所より
始まる。母を失ひ今又父を失ひたる不幸兒は、伯父
の許に引きとられ京都に移る。伯母と意合はず其上
木嶋雪子なるものに對する戀は成就せず。逆境に育
ち戀に失望ししかも全然藝術に没頭する事を得ざる
彼は、人世の不如意不安煩悶の極、終に稚子が淵に
投死する迄の道行を物したものだ。着眼惡しからず
だが、此種の行程を描寫するに筆の未だ到らざるを
遺憾とする。隨分人一人を文壇で死なす事の容易な
らざるを觀て取り、仲々材料は巧に按配されてはあ
るがかの有名なりヒョアド・ワグナカが處女作に於

ては何れも無難な作で、工巧な人かを舞臺に馳せしめるのには比較して遙に工夫があるのは結構だ。

十二月六日 無何有妄批

○戸澤教授の評

高等學校時代の文章と云へば、論文か記事文と極まり切つて居た時代は、いつの間か過ぎ去つた。懸賞文にさへ、小説が多く出る様になつた。しかも一昔前ならば、こんなものを書いたら、「剛毅朴訥」の連中から擲られさうな戀愛小説まで出さるゝ様になつた。變れば變るものである。

此回の懸賞には應募者が只だ六人しかない。とは餘りに心細い譯ではあるまいか。併し眞に出來る腕前を有する人間はいつも人に知られずに潜んで居る者であるから、此回の六人以外にも幾多の伏龍鳳雛がある事であらう。決して此六人か龍南會全体の文章家を網羅したものではあるまい。かく考へれば決して餘り悲觀するにも及ぶまい。

さて是に一々短評を試みる

○休暇の夜語 一種の自序体述懷で、往年宮崎湖處子の「歸省」といふ書が大に流行した事があつたが何

處か其「歸省」中の一章といふ位がある。田舎の風情は發分出て居るが文章粗雑、加ふるに作者自身に一種の銜氣あり氣障の感がないでもない。尙修養を要す。

○市藏 無古の小人が盗人になり行く心理的徑路を描寫せんと試みたる小説で、罪を社會に歸するといふ趣向、此趣向新しとは云ひ兼ねる。描寫の文章亦拙と云はざるを得ぬ。

○花散る頃 戀愛小説で、描法は餘程黒人じみて居る。處々に幼い處があるが、大体に於て小説たるの体裁もあり、熱もある。或は自己の經驗の告白にはあらずやと思はしむるまで上手に出來て居る併し龍南會の懸賞文としては撰外に置きたい。

○事物の根本關係を論じて象徵主義に及ぶ これは中々の大論文で、文章は所謂意到り筆從ふもの佛書佛説の解釋の當否は、評者に判斷の知識なきを遺憾とするが、此論文だけで見れば條理井然として居る。平生讀書と熟考との心懸がなければ、漫然これだけの文章が書けるものではないと思ふ。實に敬服に値する。只だ此種の文章家は往々自家の腕達者に任せ

將來動もすれば思想文章共に粗大に流れんとするの弊があると思ふ。其點を慎まれんことを、老婆心ながら、此論文の作者に注意して置きたい。

○死ぬる迄 早く父母に別れて伯父夫婦の許に人となつた、不遇の子の境界を描いた、繼兒小説の一種で、全体の趣向は甚だしく平凡でもなければ甚だしく非平凡でもない。文章は花散る頃に比べて二段三段の下にあると云はざるを得ぬ。併し概言すれば佳作でもないが、甚だしき拙作でもない。努めて止まらずに妙境に進まんと云ふ位の程度である。

○塔の聳ゆる國 悲憤慷慨的の論文、文章は絢爛とも申すべく、極めてアースチックで、煉磨に煉磨を重ねた努力が十分に見ゆる。文章の修業にはこれに至極結構であらう。多少の熱があるが、其熱もアースチックに感ぜられるは感服せぬ。思想は未だ幼稚と評せざるを得ぬを遺憾とする。

○村上教授の評

市藏。短篇にしていふべきものなし。

花散る頃。學校の懸賞文としては穩當ならず。

休暇の夜語。文脈支離して誤字尠しとせず。

塔の聳ゆる國。文字謹嚴にして字畫を忽にせず且つ間譽濶なる筆致ありと雖も文脈整齊を缺けるは惜むべし。

死ぬるまで。一篇の趣旨徹底して其體裁を得たるも後半稍世態人情に符合せざるか如し辭句は概ね穩當にして非難すべきもの尠し

事物の根本問題。應募文は多く小説なるに本題獨り論文なるは實に萬綠叢中紅一點の概あり論する所滔々數千言事物の關係を説くに華天の哲理を以てし遒勁の筆趣多く應募文中の巨擘と謂ふべし但し結論の臆雜にして文字の謹嚴ならざるは蓋しこの文の疵瑕と謂ふべき乎。

○宮野教授の評

○事物の根本關係を論とし象徵主義に及ぶ 此論文を一貫して橫流する主調は眞實性なり飽迄事物の根原に徹底せんとする純眞なる努力には自ら莊重なる零圍氣を伴へり作者の言ふ象徵主義には吾人も同感なり此一篇が尙は未成品の感を與へる所に作者の未來ある前途が暗示し論文そのものが作家自身の象徵たるの感を抱かしのたり

○若の谷の國、感の生活、一説、を言調した

る所に作者の眞摯なる態度が最も強く感ぜられたり
新らしき眞理が新らしく語れるものと言はんよりは
寧ろ古き眞理が新らしく述べたるものに似たり併し
新らしき眞理に對して古き言ひ方は古るものに比し
て優る事萬々なり時々字句に拘泥したる爲め思想の
奔流を阻害したると前半の堂々たる論陣に對比し後
半の稍振はざるの觀あるは遺憾なり

○休暇の夜話 單に感想の儘を書き連ねたるものに
過ぎずとするも今少しく推敲したるものにてありた
し母の病氣に逢着して覺醒する所迄は餘り深味に乏
しく興行のなき感想に過ぎず浪漫的なる所を狙へる
氣分が何時の間にか消ゆるあたりは不用意の結果と
言はざるを得ず

○死ぬまで 此作者は女性の心理解剖には可なり鋭
利なるメスを加へ得る手腕を有するものと見て秀夫
の祖母も咲子も下女も夫々相當に描き分けたり、と
りわけ伯母の性格は最も巧みに描かれたり之れに反
し伯父と秀雄との性格殊に秀雄は主人公なるにも不
拘極めて低級なる類型的人物に描して最も振はず其

男性味に乏しきため最後の場面も深刻なる感と與へ
ず

○市藏 短篇としては可なりにコンパクトなるもの
に作成され讀過の際不圖チエーホフの作風を思はし
めたり全篇を通じて作者が主觀を表はさざらんと努
めたる跡は認めらるゝも唯一つ「ほんとに可愛想な
市藏であつた」と突然作者の主觀が飛び出したる所
は遺憾なり最後に市藏が「小さい赤子の目も俺には
珠き立てた鏡のやうに見ゆる」と言へるは罪人の心
理をゴンドルスしたものと見て得難き一句と思はる
○花散る頃 極めて感傷的な小説にして濃艶なる
筆致を示さんとしたるも作中の性格に鮮明なる個性
現はれざりしたため全体の情調は甚だ稀薄となり結末
に至り安價なる劇的效果を收めんとしたる如き寧ろ
失敗の作たるを免かれず

◎佐久間教授の評

○『死ぬまで』は可成りの長篇であるが、視點が種
々に動搖して居ると、心理的の見解が淺薄なのが
大缺點である。例へば死に至るまでの内的葛藤の描
寫が少しも透徹して居ない。筋を面白く運ぶのが小

説の眼目でないとは云ふまでもあるまい。それから秀夫といふ主人公に敬稱を用ゐたり用ゐなかつたりする氣が知れない。此作者が引續いて此方面に開展して行かうとならば、何はさて描き、人非其者に對するもつと周到にして深刻な觀察と考究とを積まねばならぬ。「市藏」には小さいもの弱いもの、平俗の意味で罪あるものと目されて居る人間に對する溫い同情があふれて居たが、此同情があまりに過度に働いて居るため、讀者に同感を起させるとが出来ない。此ために作者がねらつたと思はれる効果が丸で滅茶苦茶になつて仕舞つた。主人公が罪を犯す経路のあらはし方も極めて獨り極めて描寫が粗雑だから、讀む人を首肯させるに足りぬ。人類に對する博大な愛を味としやうと思つたら、もう少しドスイエフスキーでも色讀してもらいたい。「花散る頃は」は甘過ぎる題材の掴み方も人生の理解し方も陳套だ。修辭のし方も新からんとして居るやうであるが、一向手に入つて居ない。それからロオマ字説もだんく勢力を得て來る今日のとであるから、昔しのやうに嚴格には云はれないけれど、此篇には誤字が可成り多い。

近頃出た成翻譯に「假借」を「苛責」、「科學」を「化學」と書いたなどは、意味が通じなくなるのだから、とても許容の出來る誤謬ではなからうと思ふ。誤字もかうなると滑稽を越して寧ろ悲惨である。此篇にはこんなひどいものはないけれど、日常用ゐる普通語に馬鹿げた誤りがあつた。これらは教養の深淺を問はれ相な事だから少し注意して戴きたい。「休暇の夜語」の聯想の行き方が面白くない。表現の方法も拙だ。こつにも「皮肉」が「卑肉」「吞氣」が「延氣」になつて居る。自分のとを「余」と言つたり、「私」と稱したり、「僕」と書いたりして一定しないも何んだか氣になる。

『塔の聳ゆる國』は詩と散文と叙事と論文との間を行つたやうなものの、視點はちゃんと極まつて居て、六かしい字を可成器用に使ひこなしてあるが、要するにあれ丈けのものだ。處によると文字を操縱するのではなくて、文字に操縱されたやうに見ねるところもある。かれらの注意すべきはこの最後の事項であらうと思ふ。『事物の根本關係を論じて象徵主義に及ぶ』は懸賞文中の自眉である。ベルグソンの流動

の哲學もカアベンタアの象徵主義的方面の思想も佛典の影響も可成りの程度で統合されて居て、筆者が平素の該博な讀書と、眞摯な考察とが首肯される。たゞ一体に冗漫で行文字句の緊縮が足りない。云ひかへると推敲彫琢が足りないのである。されは單に文字丈けの事ではなく、思想の方面でももう少し省察熟慮してもらひたいと思つたところもあつた。さうは云ふものゝ佳篇秀作の少なかつた今次の應募文中にこの一篇を得たのは、選者としての私には嬉しかつた。倦まず撓まずこれまでの態度をぐんぐんと進めて行つて戴きたい。但し草稿の汚ないのには全く閉口した。筆者もいそがしからうが、選者も多忙なのだから、向後はもつと読みよいのを出してもらいたいのである。妄評臆荆。(十二月四日佐久間)

◎高木教授の評

今回の小説一般に通じて次の様な欠點がありはしないか

一、觀察が粗である、又直接でもない。自分が嘗て中央公論などで讀んだ小説を透して間接に物を觀て居るといふ弊がありはしないか。

二、説蘭が冗漫に過ぎる。例へば「彼女が丸髷に結つた事を見た事が無かつた。實察彼女はそんな髷は結ばなかつた、彼女には人妻と見られる事が淡い苦痛であつた。そして年の寄るのを此上もなく苦しめた」で實際必要なのは最初の一句丈けである。此一句で次の二行余は既に解つてしまつて居る。

其他は小説家志望でもあるまい人々に望むべき事でも無さそうだから省く。長所も省く。

次に「事物の根本關係を論じて象徵主義に及ぶ」は面白い作である。併し單に文章といふ方面から觀れば相應に欠點もある。第一に語の經濟と云ふ事にもう少し注意を要する。無論紆曲して云はなければならぬ處を直進するにも及ばず、又細説すべき箇所を端折つて論じ去る必要も無いが、唯冗句丈けは省きたいものである。例へば「一般に人の云ふ語を用ふれば」を「所謂」とする爲に別に不都合は起らない。かゝる意味の語句の經濟によつて本稿は其何分の一を縮少するか、或は作者が言及したくつても紙數に制限せられて出來なかつたらしい事共の幾分なりとも補ふ事が出來よう、之は作者には相應の時間つぶし

である。けれども一旦發表する此上作者は讀者の爲に之位の事はする必要がある。稚嫩は一種の義務である。

次に文章の方面から觀た此文の長所は比喩の巧妙な事である。すべて哲理めいた論文には枯淡と信屈とが附物で、從て之を緩和する爲には相應の彩色が必要である。本文が潤澤な比喩などによつて淺膚に陷らない程度に修飾壯嚴せられて居るのは此必要に應じ得たものであらう。

御大典 奉安所建設費收支報告

收入ノ部

- 一金貳百五拾壹圓六錢
- 一金貳百貳拾四圓四拾錢
- 一金參圓九拾壹錢
- 合計金四百七拾九圓參拾七錢也

支出ノ部

- 一金四百參拾八圓
- 一金七圓五拾錢
- 一金拾貳圓五拾錢
- 一金拾圓
- 本校職員一同寄附額
- 本校生徒七百四拾八名寄附額
- 銀行預金利息
- 御眞影奉安所建設費
- 寄附者姓名簿及同箱代
- 清祓式神官謝禮及諸雜費
- 事務取扱補助者謝禮

一金七圓參拾七錢
合計金四百七拾九圓參拾七錢也
差引ナシ
右ノ通相違無之候也

御大典 奉安所建設費實行委員

- 杉山岩三郎
- 平塚忠之助
- 長江藤次郎
- 松本岩太郎
- 小松信一
- 仙川公篤
- 山田山

寄贈雜誌

- 無盡燈 自七月號至十月號
- 校友會誌 五四、六四
- 會誌 九月號
- 禪學雜誌 自八月號至十二月號
- 十全會雜誌 一〇一
- 學友會報 一二六
- 研瑤會雜誌 一〇八
- 耀々會雜誌 一〇八
- 同僚會雜誌 四一
- 京都眞宗大谷大學
- 東京高等師範學校
- 第六高等學校
- 東京曹洞宗大學和融社
- 金澤醫學專門學校
- 神戸高等商業學校
- 長崎醫學專門學校
- 福岡縣立中學明善校
- 修猷館同窓會

榮城 四六
不動 一八
故郷 一九
京陵 三四
桃陰 五七
校友會雜誌 五一
ミナト 十月號
西海藥報 自二三至二六
校友會雜誌 二五六

佐賀中學校
鹿本中學校
鎮西中學校
熊本第一師範學校
天王寺中學校
麻布中學校
博多詩社
西海藥報社
第一高等學校

編輯を了りて

△枳殼の黄い葉がすっかり黒い土に落ち盡して、マント姿がチラホラ見える様になりました。今朝登校の途中、校内植物園の椿の葉蔭に紅い花を二つ見出して、例年に比して暖い様だが兎に角冬に入つたなと思ひました。然しあの並樹の櫻の梢に、青々しい空を背景にして、緋紅の葉が揺れてゐるのを見ると、未だ未だ秋の感じも容易に去りませぬ。でも此の雑誌が諸君の手に渡る頃は、教室のストオヴが直つ赤に燃えて芝生は霜で灰白うつてゐるでせう。
△依然として印刷費の低廉にならないには眞個困つ

て仕舞ます。経費の許す限りを盡して前號よりは稍厚いものが出来ました。其の代り次號は又薄くせなければなりませぬ。

△懸賞は全て六篇集りました、余り大きい期待をするのは無理かも知れませぬが十篇以下では少々情氣無いと思ひます。十五六篇は集りそうだったのですがいざとなると仲々其様に調子宜くは運びませぬ御忙しい時間を割かれて、面倒な審査の勞を執られ且つ懇切な御批評を賜つた長江、村上、戸澤、宮野佐久間、高木六教授の方々に厚く御禮を申し上げます。

一二等は共に論説でした。三等の『花散る頃』はあでやかな、洗練された長編でしたが内容が不適當な爲に掲載の出来ないのは甚だ遺憾です。揭示に取材隨意とは書きましたが、あれは絶對的の意味では無くて、龍南會雜誌に掲載せる可き素質を基底とし、其基底の上に於ける隨意の意味で、夫程細々しく書く必要はあるまいと思つて簡單に四字で済ましたのです。苦心の大作を闇に葬らなければならないのは呉々も残念ですが、本誌が純藝術雜誌で無い以上萬止

むを得ませぬ。

△原稿も今度は澤山集りました。編輯の都合で一二篇は次號へ廻す事にしました。最も澤山集つたのは短歌で頁の不足で大々的に削除しなければならなかつたのは寔に心苦しい次第でした。貧乏世帯では萬事思の儘にはなりませぬ。惡しからず御丁察を願ひます。

△佐久間、高木兩教授の御執筆下さつた事は吾々の深く光榮とする處です。乍末筆厚く御禮を申し上げると共に今后益々御愛護あらん事をお願い致します。△試験が近づきました。だが其の後には二週の休みが横つて居ます。故里の火鉢の邊りで豊かな文藻を十分に醺酔せしめ燃燒せしめて、三月發行の次號の爲、心を罩めた土産を龍南の同胞に呈せられん事を祈望します。(二二、八、碌郎)